

三木栄先生をお訪ねして

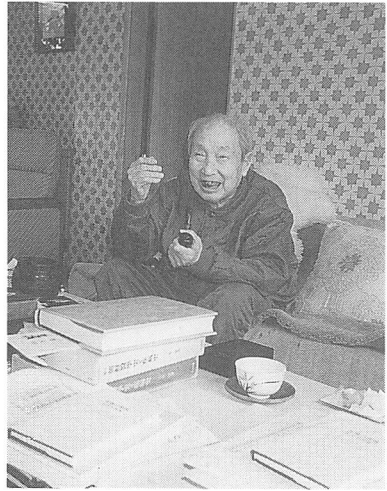
この訪問記を三木先生ご自身のお目にかけれなかったのが残念であるが、今は長門谷氏の実行力によって、訪問が先生のお元気なうちに実現したことを喜びとしたい。同氏によれば「この訪問を最も喜ばれたのは他ならぬ先生ご自身だった」とのことである。

(編集委員会)

長門谷 洋治

三木栄先生のお宅は大阪府堺市若松台二丁の医療センター内にある。千里とともに大阪府の二大ニュータウンである泉北ニュータウンの西南にあたる部分で、難波から出る泉北高速鉄道の泉ヶ丘駅でおりに車で数分のところである。このニュータウンができるまではやはり堺市の熊野町という一等地で開業しておられた。そこは現在銀行になっている。その熊野町の医院に掲げられてあった木でできた「三木医院」という看板が、そのままこのモダンなニュータウン内の医院の玄関にも掲げている。もつとも現在三木先生は診療は行われておらず、ご長男の謙氏が内科医として医院を仕切っておられる。

先般来、『日本医史学雑誌』編集委員長の三輪卓爾氏より「新企画として学会の諸先輩を訪ねてお話をきくことを考え



訪問したときの三木栄先生

上には我々のためにご著書、別刷などが並べられていた。

先生は明治三六（一九〇三）年のお生まれだから、八十九歳、やはり長寿というべきであろう。昭和六〇（一九八五）年ころ、頭部外傷・膀胱結石などで短期間入院されたことがあるが、なかなかのお元気で、はりのある声で我々を迎えて下さった。ふくよかなその顔は、先生がその地におられ（一九二八―四四）、その地の医学史研究に全精力を投じられた韓国（当時朝鮮）の老人の姿を彷彿とさせるものだった。

「すぐ物忘れて……」とのことであるが、いったん医史学の話になると直ちにきちつとした内容をすらすらと申され、自分の考えを添えられる。歯に衣着せぬ、我々の世代に対する直言もあり、思わず身のひきしまる場面もあったが、つぎの瞬間には穏やかな顔・話題に戻っておられ、一同は時の経つのを忘れた。終始たばこを離されず「十八のときから吸うていてどうもない」と一笑された。

先生の年来の主張でもあり、自らそれを実践してこられたところを発言の中から、二・三拾いあげると視野を広く持

ているが、その手始めに三木先生を訪ねて欲しい」といわれていた。小生は先生と同じ堺市に住み、ときどきはお宅にお邪魔しているのだが、そういわれると却って気おくれがし、一日延ばしにしていたところ、北里研究所附属東洋医学総合研究所医史学研究室の真柳誠氏らが一緒に参加するとの申し出もあつたので、三木先生と親しい宗田一氏（京都市）もおいでいただき、四名でお宅を訪ねたのは一九九二年五月七日木曜日の午後であつた。ご令息夫人に医院階上の広い応接室に案内される。壁面には『大医許浚像』（許浚は『東医宝鑑』の著者）など三木先生ならではの貴重な資料が掲げられてあり、机の

て、先輩・同輩に積極的に教えを乞い、外国の知人を増やせ、いろいろのところにグループで、あるいは個人で訪れる、ことに図書館・文庫などを充分利用するが良い。自著を作ったときは最低二部を手元において、その一冊は書き入れ用のノートとして使う。印刷したものはあとに残る。もつとも自著も誤が全くないとはいえない。それはつぎの人が直してくれるだろう。利用の終わった本はまとめて図書館・書屋などへ寄贈したり、(朝鮮医学史関係のものは杏雨書屋にはいつている)後輩に与え、残りは古書店に売ってつぎの出版の費用とする。(ときどき古書店の目録に「三木栄氏書入本」と注のついた本が出ている)自分の場合、商業出版で引き受けてくれるところもなく、出版助成費も得られなかったので、大半は自費で出版した。これにはばあさん(夫人)の理解・協力が大であった。『朝鮮医学史及疾病史』も最初は孔版で百冊のみを刊行した(一九五五年、一九六三年には活版で改訂版を出し、のち補訂本もできる)。今から思えば当時だったからこのような大部のものが孔版でできたのだ(今はそのような職人がいない)。一九五六年公刊の『朝鮮医書誌』も孔版で出した(一九七三年に増修本を活版で出す)。上記とともに三部作の一となる『朝鮮医事年表』は一九八五年に篤志家の拠金を得て思文閣出版より上梓し得た。これらに対し、日本医師会最高優功賞をはじめ、韓国の学界から感謝牌などが多く贈られ、先生宅を訪れた同国の人も少なくない。

先生は戦前・戦中の十数年を京城大学医学部助教授、京畿道立水原医院長などとして過されるかたわら、未開拓の分野であった朝鮮医学史の集大成にとめられ、朝鮮の古医書を積極的に集められた。その後、朝鮮戦争などもあって現在ではもはやこれらの集書は不可能である。疾病史とくにコレラや麻疹などの伝染病史ではいくつかの新知見が得られたが、これらがびしっと書けた(たとえば一八二二年のわが国の最初のコレラ侵入の経路を中国より朝鮮半島經由、下関に上陸したとする)のは、自分が臨床医としてその地で実地の体験をしたのと、当時の記録を丹念に読んだ結果であるとされる。しかし残念なことに、とくにわが国での朝鮮疾病史をきちっと読んだくれる人がほとんどいないといわれる。かくいう小生もその一人で恥ずかしいことである。

先生は「日本の医学は朝鮮の医学」と喝破され、また「不通朝鮮半島医学、不可以説島国日本及大陸中国医学」と結論しておられる。たとえば李氏朝鮮では『郷薬集成方』（二四三二）『医方類聚』（一四七七）、それに前記許浚の『東医宝鑑』（二六一三）の三大医書があり、わが国にも影響するところ大であつた。

そして朝鮮通信使による江戸時代の日朝交流では朝鮮人参などの将来があり、周知のように朝鮮人参は現在の医療でも一部に強い支持がある。

戦後、従軍や外地勤務から戻られた中野操、三木栄両先生を中心に岡西為人、阿知波五郎、布施玄治、宗田一、大岡忠明氏らが、一九三八年に億川撰三、大矢全節、中野操三氏が主唱して成つた杏林温故会（のち日本医史学会関西支部）の活動を復活された。当時は佐伯理一郎氏や羽倉敬尚氏も元氣であり、一方藪内清氏や藤野恒三郎氏も積極的に参加・協力された。毎月のように各地で例会を開き、多くの参会者があり、ひとり関西の医史学のみでなく、戦後のわが国医史学復興の源流となつた。中心になられたのは中野支部長であるが、これを強く補佐されたのが三木先生であつた。

一方、三木先生の仕事に共鳴、大きく寄与されたのが三木先生と同じ九大の出身、阿知波五郎氏であり、『体系世界医学史（書誌的研究）』（医歯薬出版、一九七二年）、『人類医学年表（古今東西対照）』（思文閣出版、一九八一年）の両著は阿知波氏との共著となつている。

先生がまだ若い（？）五十歳すぎに、中野先生と共同して発掘されたものに伏屋素狄に関する研究があり、その成果は『医譚』復刊第七号（一九五五年）に「伏屋素狄の研究（家系・略伝・著述・解剖生理学実験）」として特集された。さらに先生はご令息の謙氏と共著で「腎機能の日本における最初の実験、東西腎機能の知識、腎動脈内墨汁注入による組織所見」（日本医事新報、一九六〇年一月）を公表されたが、これは素狄の実験を再現し、現代医学の立場からこれを検討するといふものであり、画期的なお仕事である。当時の先生は往診に、資料探査にスクーターで気軽に出掛けられていた。

先生の話好き、大声は老齡になられても少しも変らない。談論風発、呵々大笑。当日はこれまた一家言ある同志、宗田氏が参加された上、真柳氏の学識、同道の韓国出身の金成俊氏（北里研究所東洋医学総合研究所薬劑部）と役者が揃ったので話とはどまるところをしらず、だが話題の中心は朝鮮のこととなり、先生が晩年力を入れられた世界医史と医倫理考についておたづねするまでには至らなかった。しかし無責任との誇りは免れ得ないであろうが、何の準備もなしで時の経つのを忘れて碩学の話のを伺えるのはなにもかえがたい至福であり、三輪編集委員長のご下命のありがたさを噛みしめた次第であった。ご令息もご一緒されてのご馳走にも預り、まったく楽しいときであった。

幸い、三木先生は近時、生涯の研究の総括的なもの「例えば『医』の史的鳥瞰——医の心は神の心——」（日本医事新報、一九八九年九月）をいくつか記されており、一九九〇年には『医史研究六十年 著作目録 付略歴』なる冊子を私家版で出されていて、この中には本誌（三三巻四号、一九八七年）に誌された「医史学と私」も転載されている。本冊子にはリストのみだが先生の同年までの医史学の著作・論文が網羅されており、我々はずしりと重い先生の仕事を感ずることができる。先生はかつて「医学史は単なる趣味でやったのではない」とびしりといわれた。まこと、三木医史学は世界に誇り得る頂点的な業績である。

先生が面談当時、これ以降は書いていない、同時点での最新作と示されたのが、小文『原志免太郎先生の思い出』（日本医事新報、一九九一年八月）である。原志免太郎氏は先生の大学における先輩であり、同年六月十八日死亡されたときは、同時点での長寿日本一、百八歳であった。どうか三木先生もこの先輩にあやかつて益々の長寿を保たれることを祈りたい。

先生は上記『医史研究六十年』の巻初部分に「この本を父龍哉・妻シズエに贈る」と記しておられる。龍哉氏はその父の業を継ぐ二代にわたつての医師であり、堺市熊野町で開業されていた。ご令室は三木先生の医業と医史学のお仕

事を支えられるとともに子女を育てられたが、二十数年前、突然脳梗塞に罹患された。小康を得られたのち三木先生は献身的にそのリハビリにあたられ、自宅の周辺の散歩に自ら附添われた。その結果であろう。ご夫人はご不自由ながら現在もお元気である。立派なご夫妻とその点でも尊敬もし、羨望もするが、だれにでもできることではない見事な夫婦愛である。

(大阪府)